

機関番号：31202

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2008～2009

課題番号：20730256

研究課題名（和文）昭和・平成期における南部杜氏の育成方法と就職斡旋方法についての研究

研究課題名（英文）Research on the method of training and the job mediation of Nanbu-Toji at Showa and Heisei period

研究代表者

堀 圭介 (HORI KEISUKE)

富士大学・経済学部・講師

研究者番号：80438514

研究成果の概要（和文）：

南部杜氏協会会員を対象として、聞き取りとフィールド調査、資料収集に基づいて酒造労働従事者（蔵人）の人材育成方法および昭和期における就職斡旋の方法について調査するとともに、酒造労働における熟練の一般的特徴について調査・検討した。その結果、現在多くの酒蔵においては各蔵人が担当工程における個別作業を遂行する上で必要とする熟練や知識だけではなく、全体の工程やリズムの中に自分をあてはめこむことができるようになることが必須となっている、ということを見出した。

研究成果の概要（英文）：

I conducted an investigation into a personnel training method and the method of job mediation of *sake* brewing labor worker of Showa period, general characteristic of skills based on hearing, and field work and collecting data among members of Nanbu-Toji association. As a result, I found not only skills and knowledge that are necessary when employees could accomplish individual task through their charge process, but also skills which they could get possible to put themselves in rhythm for a total process.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	500,000	150,000	650,000
2009年度	400,000	120,000	520,000
年度			
年度			
年度			
総計	900,000	270,000	1170,000

研究分野：経営学

科研費の分科・細目：経営学・経営学

キーワード：酒造業，人材育成，熟練，協業

1. 研究開始当初の背景

本研究を開始するにあたっての背景・動機

としては以下の2点が挙げられる。

まず第一に、南部杜氏協会会員に限らず全

国レベルでも酒造業に従事する人材は減少の一途を辿っており、後継者育成が急務の課題となっている、という事実である。この現状を鑑みるに、蔵人の熟練技能の体得に関して先行研究を踏まえたいうえでどのようにして酒造労働従事者（蔵人）が高度な熟練を獲得してきたのか、という点に関してのさらなる調査・分析が必要であると考えられる。また、現在の酒造業界における後継者不足に対する危機、さらには今後の杜氏を含めた蔵人の育成事業に寄与したいという動機が出发点となっている。

第二に、昭和期における蔵人の就職斡旋機能を補完するものとして、県南地域の有力杜氏による斡旋があったという事実である。この有力杜氏と他の杜氏を含めた一般の南部杜氏は師弟関係にあったとされている。こうした師弟関係で結ばれた杜氏集団は「古典的」酒造労働に見られた一つの特徴であるが、これまで全く知られていなかったこの師弟関係の実態を各種聞き取りと資料収集により明らかにする必要があると考えたためである。

2. 研究の目的

研究目的としては大きく以下の2点が挙げられる。

第一に、酒造業、特に中小規模の酒蔵における人材育成の方法および熟練の体得方法を明らかにすることである。南部杜氏の場合、現在の蔵人育成方法としては、通常二つの施策が挙げられる。第一は南部杜氏協会が主催する講習会によって理論的知識を習得させる（Off-JTによる）方法である。第二は個々の酒蔵において実際に仕事に従事しながら学習する（OJTによる）方法である。本研究では特に第二の方法に焦点を当てる。より具体的には、蔵人が現在担当している工程においてどのようにして熟練を向上させているか、さらに基本的に分断された各工程間のギャップはどのようにして埋められてきたのか、すなわち熟練の段階的な向上はいかにして可能となっているか、という点について明らかにする。なお、清酒製造工程において最も熟練を要する工程は吟醸酒造りにおける浸漬や製麴であるが、この工程を担当する杜氏や各工程担当者の持つ熟練がどのような形で発揮されているか、という観点から労働現場を詳細に記述した研究はあまり見られない。これは製麴工程をはじめとした吟醸酒造りの各工程が一昼夜を通してなされるものであること、さらにはこうした熟練そのものが暗黙的なままに留まっていることが多いことに起因すると思われるが、本研究では岩手県内の酒蔵で参与観察を実施するとともに聞き取り調査を実施することにより、蔵人の持つ熟練の一般的特徴を明らかにするこ

とを目指す。また、この熟練の特徴に関連して、工程の機械化が進んでいる関西圏の大規模な酒造メーカーとの比較を行うことで、蔵人の熟練はどの程度まで機械により代替されるのか、という点について明らかにする。なお、第一の方法については毎年夏季に南部杜氏協会が主催している講習会に参加しその実態を把握する。

第二の目的は昭和期の南部杜氏に見られた一つの特徴である就職斡旋を含めた師弟関係（徒弟関係）の実態を明らかにすることである。これまで実施した聞き取り調査において明らかになったことは、昭和期における南部杜氏協会の酒蔵への就職斡旋機能を補完するものとして、県南地域の有力杜氏による斡旋が存在したという事実である。聞き取りによればこの有力杜氏と一般の南部杜氏は師弟関係にあり、昭和40年代には約20%の南部杜氏協会会員がこの杜氏と師弟関係で結ばれていたとされている。こうした師弟関係で結ばれた杜氏集団は「古典的」酒造労働に見られた一つの特徴であるが、これまで全く知られていなかったこの師弟関係の実態を各種聞き取りと資料収集により明らかにすることによって、昭和期における南部杜氏の育成方法と酒造労働の特徴に新たな知見を加える。

3. 研究の方法

本研究においては聞き取り調査と参与観察を中心とする定性的分析を採用している。この方法を採用した第一の理由としては、参与観察の前もしくは後に聞き取り調査（半構造化面接）を行うことによって、蔵人がどのような意図を持って作業に臨んでいるか、作業を遂行する上でどのような点で困難を感じている（きた）か、という点についてより精緻に知ることができると考えたためである。こうした行為当事者の意図や思考について分析することは、蔵人がどのようにして熟練を体得してきたのか、という問題を考慮するにあたっては非常に有益である。第二の理由は、清酒製造そのものは単に蔵人が個々の担当する工程を寄せ集めれば可能になるものではない、ということによる。酒蔵での労働においては蔵人同士の相互作用（熟練の向上に寄与する何気ない会話やアドバイス）が頻繁に見られ、さらには協業が必要となるのであり、こうした相互作用を参与観察によって詳細に捉え、聞き取りによって了解する必要があると考えたためである。

4. 研究成果

前述の研究開始当初の背景、目的、方法に基づき行われた調査研究によって得られた成果としては大きく以下の3点にまとめられる。

第一に、酒蔵での参与観察および蔵人への聞き取り調査に基づき、酒造労働の具体的内容および必要とされる熟練の一般的特徴を明らかにしたことである。酒蔵での労働の場合、必要となる熟練は、大別すると個別工程における熟練と工程全体に関する熟練に分類することができる。前者についてまず見るならば、これは暗黙的な要素を多分に含んだ「パターン的な現象把握」と科学的知識に基づく「原理構造的な現象把握」が混在した形で発揮される熟練として把握することが可能である。多様な経験に基づいて各種のパターンが暗黙的な知識として蔵人の内部に蓄積されていき、実際の操作においてはその都度修正を加えながら適切な判断を下すことが可能となる。なお、清酒製造における熟練ないし技能が Polanyi の言う一種の暗黙知に相当するものであるということは先行研究においても指摘されているところであるが、本研究ではさらに議論を進めてなぜそれらが暗黙的なままに留まっていることがしばしばありうるのか、という点について複数の杜氏への聞き取りに基づき考察した。すなわち、その時々にはふさわしい操作を実行する際の判断の基準となる、考慮に入れなければならない条件ないし要素が多いため、さらにその各々の要素が各種操作の各段階で微妙に変化しつつ、複合的に重なり合ったような状態として行為者に把握されているために暗黙的なままに留まっている、ということである。これらの内容は論文「酒造業における労働と熟練」として公表した。

さらに本研究では、これまでの酒造労働における研究では触れられることのなかったタイプの熟練としての「協業のための熟練」（蔵の中にある各種の情報から各工程の進捗状況を把握し清酒製造という工程全体の流れに自分を当て嵌めこむことができるようになること）を見出した。この協業のための熟練は、これまで聞き取りを実施した蔵人全てが各工程における熟練と同様に重要な熟練として位置付けており、一人前の蔵人となるためにはこのタイプの熟練を獲得することが必須となる。新参の蔵人は、他の蔵人の作業を適宜手伝いに行ったり、蔵人全員で行う作業に参加したりすることによって、酒蔵全体での作業工程の流れを徐々に把握し、工程全体の流れに自分をあてはめるといった形で協業のための熟練を獲得していくことになる。酒造労働において蔵人が一人前のとなるためには、この二つのタイプの熟練を獲得することが求められている。

第二に、聞き取り調査に基づいて前述の「協業のための熟練」概念をより精緻に考察した。この協業のための熟練が酒蔵での労働において重要な位置を占める理由は以下の2点に要約される。まず第一に、「前近代的」

な工程の不完全さから必要となる「協業のための熟練」は、蔵人が高度な熟練技能を保有する杜氏となるためには必要不可欠なものであったということによる。協業のための熟練が必要となる理由は、工程の「不完全さ」

（各工程の作業が各工程の担当者のみでは回らなくなること・機械化や合理化が大手酒造メーカー程には進展していないこと）に求められるが、こうした協業は蔵人に自分の担当している工程と他工程を連関付け、製造工程全体を学習させるという機能を果たしてきた。協業のための熟練を獲得する過程とは、工程全体に関する理解を深め、工程の流れやリズムに自分の作業を同期化させることができるようになる過程であるとともに、自己の置かれている物理的・社会的位置を理解してゆく過程でもある。清酒製造は断片化された部分の単なる集積ではないため、協業のための熟練を獲得することは、蔵人に各個別工程における熟練技能を向上させることに繋がる。一見したところ合理化の遅れから必要となる協業は、酒蔵において蔵人を一人前にするうえではむしろ「合理的」な機能を果たしてきたと言える。第二に、質の高い清酒を造るためには蔵人が「協業のための熟練」を高いレベルで獲得する必要がある、ということによる。作業工程全体のペースや他の蔵人の作業の進捗状態を把握することが「協業のための熟練」を獲得するためには必要であるが、これらは杜氏が理想とする清酒の味や香りに関する理想やイメージ、感性といったものによって規定される。蔵人が酒蔵での作業の流れやリズムを把握して「阿吽の呼吸」をもって働くということは、そうした理想やイメージ、感性といったものを杜氏と共有していることを意味する。なお、複数の杜氏への聞き取りによれば、協業のための熟練を獲得するためには、蔵内の各種の情報を利用したり作業のペースを理解したりすること以上に、酒蔵における労働のあり方を規定する中心的存在である杜氏と感性を共有し、阿吽の呼吸をもって作業に従事する必要がある。この理想像は清酒製造に関して全責任を負う杜氏によって決定され、この決定に基づいて各蔵人の作業のあり方が規定されるため、酒蔵における労働にはまず杜氏という「中心」が存在し、この中心的存在によって労働のあり方が規定されてゆくと考えられる。これらの内容は論文「協業のための熟練と『阿吽の呼吸』」として公表した。

第三に、昭和24年から現在までの南部杜氏協会北上支部歴代会員全員の就職状況と勤務地に関するデータを『南部杜氏協会北上支部八十八年史』における資料部分としてまとめた。ただしながら、研究目的の第二に挙げた昭和期における南部杜氏の就職斡旋を含めた師弟関係（徒弟関係）の実態を明らか

にするという目的に関しては、ある程度実態について聞き取りを行うことができたものの、収集できたのは当時関係者からの部分的な聞き取りデータに留まり、一次資料を収集して徒弟制度の下での動的なネットワークまで分析することができなかった。この点に関してはさらに調査を継続してゆく必要がある。

以上3点が本研究を通して得られた研究成果である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

- ①堀圭介「酒造業における労働と熟練」『富士大学紀要』第42巻第1号, pp.95-112, 2009年, 査読有
- ②堀圭介「協業のための熟練と『阿吽の呼吸』」村田和彦編『企業社会と市民生活』pp. 147-169, 2010年, 査読無
- ③堀圭介「大手酒造メーカーにおける分業と協業」『研究年報』(富士大学地域経済文化研究所)第18号, pp. 41 -46, 2010年, 査読無

[学会発表] (計0件)

[図書] (計1件)

- ①藤原隆男・堀圭介『南部杜氏協会北上支部八十八年史』南部杜氏協会北上支部, 2009年.

[その他]

ホームページ等
なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

堀 圭介 (HORI KEISUKE)
富士大学・経済学部・講師
研究者番号：80438514

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：